

群 教 セ	G06- 02
	令 2.275 集
	体育-小

児童同士が対話を通して運動の能力を高め合うための小規模校における指導の工夫

—異学年(学年ブロック)で構成するグループを活用して—

特別研修員 小金澤 真住

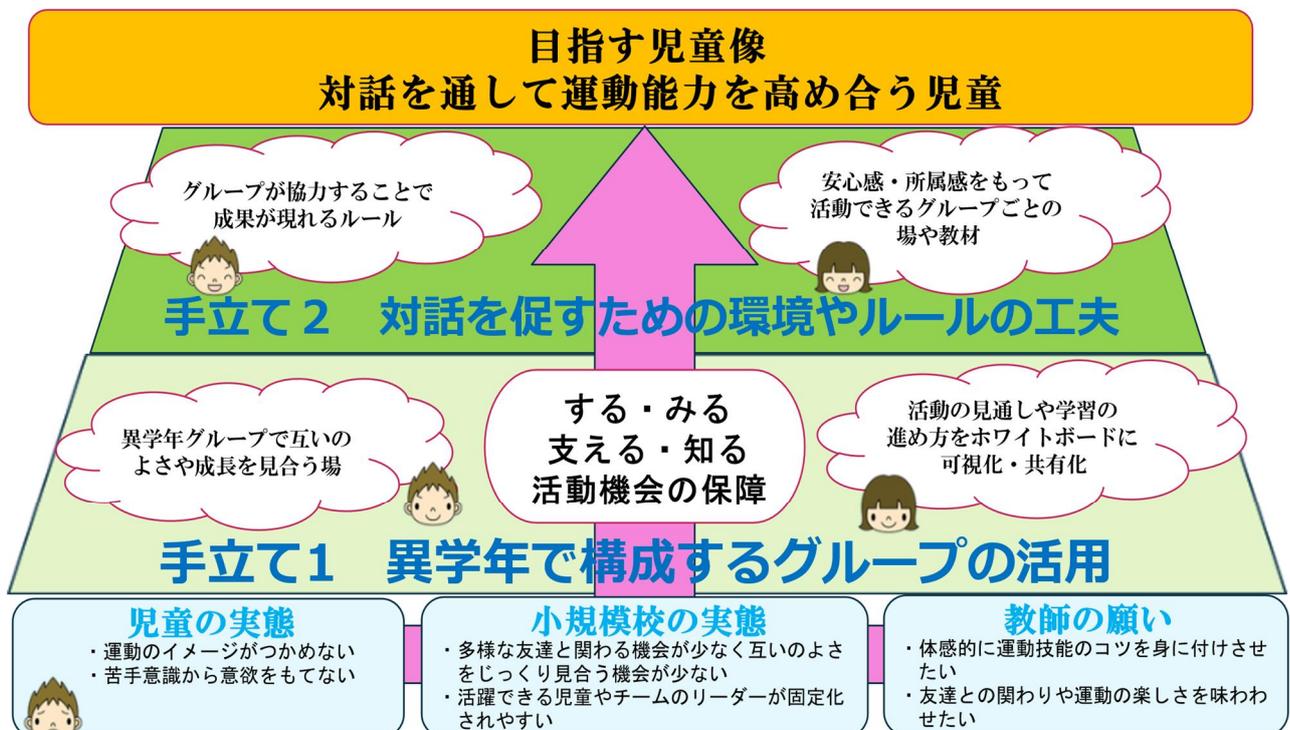
I 研究テーマ設定の理由

小学校学習指導要領における体育では、「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力」を育成することを目指し、「思考・判断したことを他者に伝える」活動や「自己の課題を見付け、その解決方法を選んだり工夫したりする」活動が重視されている。各運動領域においても「自己の(能力に適した)課題を見付け、(自己や仲間の)考えたことを友達(他者)に伝える」「友達の考え(仲間の考えや取組)を認める」「誰とでも仲よく(約束を守り助け合って)運動をする」「勝敗を受け入れる」など他者と対話的に関わり合うことによって成長する児童の姿が求められている。

研究協力校(以下、協力校)は全校児童 98 名の小規模校であり、学年で行う 10 数名の体育では「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方を体験することや、運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有するという観点において、課題が見られた。そこで、異学年(学年ブロック)によるグループ学習の形態での体育授業を行うことで、児童が自分自身では気付けない学習課題や成果について対話を通して多面的に捉える機会が増え、運動能力の向上につなげていくことができるであろうと考え、本研究テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

小規模校で行う体育では、一斉指導により学習を進めていくことや、児童一人一人の運動量を確保していくことは容易な反面、様々な友達と対話的に関わり合いながら学ぶことや、多様なグループや新しい人間関係で活動していくことは難しいと考える。また、他者の運動をじっくり見る機会が少ない、審判等の役割を担う必要感や経験の不足、運動領域によっては技能の差から運動に苦手意識をもち、体育授業への意欲につなげられない児童が増加傾向にあるなどの課題が見られた。そこで授業改善の視点として、次の二つの手立てを取り入れた。

手立て1 異学年（学年ブロック）で構成するグループの活用

「する・みる・支える・知る」の多様な関わりを実現するため、児童の実態をもとに編成する。

手立て2 対話を促すための環境やルール工夫

グループごとの活動の場や教材を準備したり、グループのメンバーが協力することで成果が現れるルールを採用したりする。

手立て1の異学年構成のグループを取り入れることで、共に学習する児童数が増え、「する・みる・支える・知る」の多様な関わりが実現できると考える。特に新たな刺激が児童の内面に作用することで、基本的な技能のコツを習得する場面や、協力し互いのよさや成長を認め合う場面を中心に有効に機能すると思われる。そのためのメンバーは、グループ間で運動能力に差が出ないように考慮しつつ、一人一人が特長を生かし安心感をもって活動できるよう編成する。

手立て2のグループごとの活動の場や教材を準備することで、グループへの所属感が増し、互いの特長を知る環境づくりにつながると考える。また、グループのメンバーが協力することで成果が現れるルールを採用することで、共通のめあてに向かって対話する状況づくりにつながると考える。

このような手立てを取り入れていくことで、児童は主体的に運動に親しむとともに、自分の考えを互いに表現する対話的活動を通して、自分やグループの運動能力の高まりを実感することができると考える。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

〈手立て1 異学年（学年ブロック）で構成するグループの活用〉

- 安心感や所属感をもてるよう配慮した異学年グループの活動を通し、児童は得手不得手に関わらず積極的に運動を楽しむ場面が多く見られた。特に上学年は自分たちから率先して場づくりを行ったり、技能のコツを自分なりの言葉で分かりやすく伝えようとしていたりしている姿が見られた。下学年も自分の目標となる児童の動きをまねし、上学年の助言をもとに技能のコツや自分の動きを確かめながら活動する姿が多く見られた。

〈手立て2 対話を促すための環境やルール工夫〉

- グループごとの場を設定することで、児童は所属感をもって活動し、前時までに見つけた技能のコツを確認し合ったり、グループの特長にあった練習を行ったりする姿につながった。
- グループのメンバーが協力することで成果が現れるルールの採用は、準備運動の段階からめあてを意識しながら声を掛け合い、全員主体的に運動に関わろうとチームの特長を生かしたり、苦手な児童を優先して活躍できるよう練習を行ったりする姿につながった。

2 課題

- 課題解決に向け、グループごとに対話を通して体現していく活動において、ワークシートやホワイトボード等を活用せず、動きながら確認していくことを目的とした。授業分析のため授業の様子を動画に残していたことが幸いし、児童同士のつぶやきや言葉掛け、グループによる特長を生かした活動・工夫された練習方法等の見取りにつなげることができた。場や環境を工夫しグループごとで活動している過程を評価していく方法については、再考する必要があると考える。

実践例

1 単元名 「E ゲーム ア ゴール型ゲーム(セストボール)」 (第3・4学年・2学期)

2 本単元について

小学校学習指導要領体育、第3学年及び第4学年の目標には、「低学年のゲームの学習を踏まえ、中学年では、ゲームの楽しさや喜びに触れ、その行い方を知るとともに、基本的なボール操作とボールを持たないときの動きによって、易しいゲームをすること」と示されている。ゲームの領域では、児童はゲームに夢中になる余り、自己の動きの様子を客観的に捉えることが難しいと考える。また、新しく提示した動きが分からないためにゲームや練習に消極的な態度を示したり、ゲームに参加している実感がもてずに楽しさを味わえなかったりする児童も少なくない。そこで、ゲームの行い方を知る場面や、メインゲームの活動の際には友達の動きのよさを見付けたり、考えたことを友達と伝え合ったりする時間を設定し、必要に応じて児童が取り組みやすいルールに変更したり、場を工夫したりしていく。

また、単元を通して異学年グループでの活動を取り入れることで、協力校の課題である「する・みる・支える・知る」のスポーツとの多様な関わりの充実を図ったり、他者との対話を通して多面的に運動の理解が進むよう配慮したりして、運動能力を高め合う児童を目指す。

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	ボール運動を通して次の事項を身に付けることができるよう指導する。 ア 行い方を知るとともに、基本的なボール操作とボールを持たないときの動きによって、コート内で入り交じってボールを手でシュートしたり、空いている場所に素早く動いたりする易しいゲームをすること。(知識及び技能) イ 誰もが楽しくゲームに参加できるよう規則を選んだり、ボールを持っている人と持っていない人の役割を踏まえた作戦を選んだりするとともに、自己の気づきを伝えたり、大切だと感じたことを友達に教えたりする。(思考力、判断力、表現力等) ウ 易しいゲームに進んで取り組み、ゲームやそれらの練習の中で互いの動きを見合ったり、話し合ったりして見付けた動きのよさや課題を伝え合う際に、友達の考えを認める。(学びに向かう力、人間性等)	
評価規準	(1) セストボールの行い方を知るとともに、基本的なボール操作とボールを持たないときの動きによって、コート内で入り交じってボールを手でシュートしたり、空いている場所に素早く動いたりする易しいゲームをしている。(知識・技能) (2) 誰もが楽しくゲームに参加できるよう規則を選んだり、ボールを持っている人と持っていない人の役割を踏まえた作戦を選んだりするとともに、自己の気づきを伝えたり、大切だと感じたことを友達に教えたりしている。(思考・判断・表現) (3) 易しいゲームに進んで取り組み、ゲームやそれらの練習の中で互いの動きを見合ったり、話し合ったりして見付けた動きのよさや課題を伝え合う際に、友達の考えを認めている。(主体的に学習に取り組む態度)	
過程	時間	主な学習活動
つかひ	第1時	・試しのゲームを通して、パスやシュートについての課題や、セストボールの行い方について理解させる。
追究する	第2時	・タスクゲームを通して、ゲームを楽しむための、シュートのコツについて身に付けさせる。
	第3時	・タスクゲームを通して、味方がフリーのときに、パスが通るためのコツについて考えさせる。
	第4時	・パスをフリーでもらうために、相手の後ろに隠れないようにコートを広く使ったり、空いているスペースを見付けて動いたりすればよいなど、ゲームを通して、パスをもらうときのコツについて考えたことや気付いたことを表現し合うことができるようにする。
	第5時	・チームの特徴に応じた作戦を考え、メインゲームを通して、動きのよさや課題について伝え合い、友達の考えを認めることができるようにする。
まとめる	第6時	・メインゲームを通して、学習活動で身に付けたことを生かしたり、自分たちで考えた作戦を取り入れたりをしながら進んでゲームを楽しむことができるようにする。

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全6時間計画の第4時に当たる。前時までの活動において、児童はシュートやパスをするときのコツについて考え、ゲームの基本的技能の習得を図ってきた。同時にセストボールのゲームの特性やルールにも慣れ、多くの児童がゲームを楽しむためにはパスをもらう際の動き方が重要であるという課題をもてるようになった段階である。そこで、以下の手立てを実施した。

手立て1 異学年（学年ブロック）で構成するグループを活用し、児童が「する・見る・支える・知る」を体験するための手立て

- ゲーム運営を児童が協力して行うための役割分担
- 友達のプレーのよさや考えを認めながらの伝え合い

手立て2 対話を促すための環境やルールの工夫

- 活動の見通しを可視化し、異学年が学習内容やめあてを共有していくためのホワイトボード
- 誰もがボール運動に親しむことができるような環境や教材の工夫
 - ・基本的技能を習熟するためのドリルゲーム
 - 「シュートゲーム」グループで1分間、ゴール(的)をねらって得点する。
- グループ内で互いの成長を認め、対話を深めていけるような時間と場の保障
 - ・パスがうまくもらえない状況を把握し、うまくもらうためのコツを伝え合うタスクゲーム

4 授業の実際

本時は、主にタスクゲームを通して、パスをフリーでもらうためには、相手の後ろに隠れないようにコートを広く使うこと、空いているスペースを見つけて動いたりすればよいことなど、ゲームを通して、パスをもらうときのコツについて考えや気づきを表現し合うことができるようにすることをねらいとした。

基本的技能を習熟するためのドリルゲーム

シュートは「ゴールの近くで打つ」・「パスをするときには声を出す」など、これまでの学習で見付けたコツを伝え合いながら行う姿が見られた。図1のように練習を行える場所をグループごとに準備することで、落ち着いてシュートを行ったり、的をねらって力を調整したりとシュートの技能の向上にもつながった。また、図2の児童が見付けたコツ「シュートしようとしている人の前に立つ」を全体の場で共有することで、1分間のシュートゲームにおいても、ボールを持っていない児童が素早くゴールの反対側に移動し、素早くパスやシュートにつなげるなど3人が常に課題を意識しながら活動することができた。



図1 グループごとの練習の様子



図2 児童が見付けたコツの例

活動の見通しを可視化し、異学年が学習内容やめあてを共有していくためのホワイトボード

タスクゲームに入る前に、パスがうまくもらえない状況を整理し、それを解決していくための動きについて見通しをもたせる場面(図3)。これまでの活動の中での課題①ディフェンスが近くにいると、もらう前に相手にパスカットされてしまう②フリーのときに声を出さないとパスがもらえないなどの状況を解決していくことをタスクゲームの目的とし、グループごとの活動に移った。



図3 見通しを共有する場面

全体で確認した状況について、グループごとに対話を通して解決していこうとする姿が見られ、動き方の分からない児童も実際の状況を確認しながら動き方のコツをつかむことができた(図4)。パスをもらう人がディフェンスの陰に隠れないよう動きを助言したり(図5)、キャッチが苦手な児童にパスをもらう手の形を再現して見せたりするグループの活動が見られた(図6)。



図4 状況を伝えている児童



図5 下学年に助言する児童



図6 パスのもらい方を伝える児童

友達のプレーのよさや考えを認めながらの伝え合い

メインゲームはタスクゲームで考えたコツを試すと同時に、グループで係を分担し互いのグループの動きのよさを見付ける活動と位置付けた。得点カードの記録を通して、味方チームのパスを促したり、自分たちのグループが考えたコツをアドバイスしたりしながらゲームに関わる姿が見られた(図7)。

また、じっくりと友達の動きを見ることがよい刺激となり(図8)、自分の動き方を振り返るきっかけとなった。自身の技能の向上を図りたいという意欲につなげることができた児童が多かった。



図7 助言を行っている姿



図8 動きのよさを記録する姿

5 考察

手立て1の異学年で構成するグループを活用して授業を行った結果、それぞれの学年ごとに特徴的な姿が次のように見られた。

4年生は、ドリルゲーム中には前時の振り返りでまとめたシュートやパスのコツなどを基にグループ内で繰り返し声を掛け、チームの技術向上を意識し活動していることが見取れた。また、タスクゲームの課題解決に向けた活動においては、下学年に難しいことを要求するのではなく、グループの特長を考慮しながら指示や助言をしていた。

3年生は、オリエンテーションの段階では、動き方が分からずにパスやシュートに関われない場面や、友達に指示されてもそれを自分の行動につなげることができない場面が多く見受けられた。しかし、タスクゲームで対話を通して状況を再現する活動や、友達の動きのよさをじっくりと見る機会を増やすことで、シュートを打つために自分からゴールの近くに移動したり、空いているスペースを見つけて移動したりするプレーが多く見られるようになった。また、振り返りにおいては、友達の助言が動きの参考になったことや、もっと技能のコツを意識して上達したいという意欲を表現する児童が多く見られた。

手立て2の対話を促すための場や教具の準備は技能が高い児童のみが活躍するのではなく、多くの児童がボール運動に親しめることにつながったと考える。また、ルールについても学習を重ねるごとにフリーゾーンを利用するよさを共有したり、全員が得点をするために教え合ったりする姿が見られた。ドリル・タスク・メインゲームの流れについては課題習熟・探求・解決の場としての意識付けが定着し、チームの特長をもとに練習方法を工夫したり、他チームの動きのよさを自チームに取り入れたりする姿が見られた。

これらのことから小規模校において異学年構成で行う体育の学習は互いに「する・みる・支える・知る」活動の充実につながり、対話を通してそれぞれの学年の運動能力の向上にもつなげていくことに有効であったと考えられる。